

1 太田地域における古墳時代前期の土器編年試案

深澤敦仁（財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団）

1 はじめに

成塚向山古墳群では、古墳時代前期（以下、“時代”は省略）の土器が出土する17軒の竪穴住居と、副葬品内容等から古墳前期の築造と考えられる成塚向山1号墳が隣接して存在する。こうした存在状況は、両者に密接な関係があるとも取れるし、一概にそうでないとも考えられる。そこで、本稿ではこれらの関係性の有無（または濃薄）を整理するため、太田地域の古墳前期の土器に検討を加え、議論の物差しとしての編年試案を提示することを目的とする。

2 これまでの研究動向

広い意味において、群馬県地域の古墳時代前期土器が「石田川式」という冠をつけて呼ばれていることは周知のことである。そして、その提唱のきっかけとなった石田川遺跡がこの太田地域にあることも広く知られていることである。

石田川式土器は、1952年の太田市米沢遺跡の調査資料をもととし、1968年の「石田川遺跡」発掘報告書刊行に際し、提唱された土器様式である（尾崎・今井・松島1968）。松島栄治氏はこの考察において、当時、和泉式以前の土器の追求が盛んであった状況を加味し、当遺跡の「第Ⅰ種土器」を分析し、「石田川式」なる土器様式の設定を行った。

また、同じ時期の1957年には太田市高林遺跡が調査され、1967年に同遺跡の調査報告（大塚・小林1967）が刊行された。この書の中で、小林三郎氏は当時研究が盛んであった五領式土器との対比をしつつ、高林遺跡出土土器群の出自や編年の位置づけについて、細密かつ慎重な分析を行った。

その後、梅澤重昭氏は1971年には米沢二ツ山古墳墳丘下住居における良好な一括資料の公表及び分析（梅澤1971）、さらには1978年には五反田遺

跡2号住居跡出土の資料を基準とした「石田川Ⅰ式土器・石田川Ⅱ式土器」の設定をし、加えて年代観にも言及した（梅澤1978）。この梅澤氏の言及は、同種の出土資料が急増し始めた当時の状況とも相まって、急速に浸透することとなった。

こうした中、1980年に大木紳一郎氏は、上遺跡出土土器群の分析の中で、S字甕に象徴される「石田川」式の理解に対して、南関東系土器群存在の一定の評価の必要性を説いている（大木1980）。

1980年代には検討資料の急増により、克明な議論の素地が整ってくるとともに、関東地方における広域編年への取り組みが本格化してきた。そうした中、1981年には梅澤重昭・橋本博文両氏が、群馬県内各地でのS字甕と在地弥生土器との関係性について論じた（梅澤・橋本1981）。さらに、橋本氏は1993年、関東北部の古墳出現前後の様相を把握する試みの中で、太田地域の土器群を北関東の包括的な土器編年の中に位置づけた（橋本1993）。

1998年に筆者は、既研究の成果を踏まえた上で、群馬県各地の古墳前期土器編年を組み立てる作業を行い、太田地域についてもその案を提示した（深澤1998）。但し、この作業は群馬県内各地域の様相差異を抽出することに主眼が置かれたため、地域内での検証が不十分であることは否めない。

1998～2000年、石田川遺跡出土土器の再整理が、小泉範明・飯島義雄・井上昌美三氏によって行われた（小泉・飯島1998、小泉・井上・飯島1999、小泉・井上・飯島2000）。この再整理により、石田川遺跡の古墳時代前期土器に再検討が加えられたわけであるが、そこに認められる資料は前期後半の資料が多くを占めることが判明した。

この他にも、近年、太田地域では古墳前期のまとまった資料が出土していることもあり、中溝深町

遺跡（福島 2000）や中屋敷・中村田遺跡における遺跡内編年（岡本 1997）の試みを行われている。

なお、太田地域を軸とした分析ではないものの、群馬県地域全域における分析としては、1981・1987・2000 年における田口一郎氏による S 字甕編年・伊勢型二重口縁壺編年・パレススタイル壺編年（田口 1981・田口 1987・田口 2000）や、1990・1996・2000 年における若狭徹氏による在地弥生土器様式の崩壊プロセス分析からの古墳前期土器の様相理解（若狭 1990・若狭 2000）があり、これらは太田地域の古墳時代前期土器の編年を考える上でも、極めて重要な考察である。

主な研究を記述したが、これらの既研究には次の 2 つの傾向がある。これらはともに、今日までの編年構築を確かなものにしてきたという点での貢献面と、その一方で、今後の研究進展のための留意点の両側面が見受けられるので、それを記す。

1 つめの傾向は S 字甕という土器が常に議論の軸となり、展開しているということである。この傾向が今日の編年構築に貢献してきたことは誰しもが認めることであり、石田川遺跡をはじめとする出土資料の内容から考えると、太田地域の編年研究の切り札としては極めて有効である。もちろん、本稿の編年分析においても、このことに依拠している面は多く、筆者自身も賛同する点である。

だが、その一方で、編年画期を求める際に、S 字甕の型式変化の画期のみが論拠となることには留意すべきである。それは S 字甕編年を否定するというだけでなく、S 字甕の型式変化に他形式の型式変化がどのように対応しているかを考慮する必要があるということである。近年の増加する資料を時系列上に位置づけようとする際に「S 字甕がないからよくわからない・・・」では、折角の貴重な資料も浮かばれないこともあるであろう。

既研究での成果の通り、S 字甕の型式変化は支持できる。だが、発掘資料においては古い型式と新しい型式が共伴する事例も多く、型式変化の明快さが発掘資料の共伴性においては必ずしも明快さをもつ

1 太田地域における古墳時代前期の土器編年試案

とは限らない。こうした発掘現場での状況を加味すれば、過度の細分類を駆使した議論は編年の本懐を見失う恐れがあり、危険である。一方、こうした状況を「混沌」と捉えてなのか、或いは整理しようとしてなのか、型式変化を踏まえた編年研究を否定し、一括的に論じる風潮も一部にあるが、これはあまりにも突飛な発想であり、無論、肯定はできない。

2 つめの傾向は、太田地域の古墳前期土器編年が群馬県西部（主に、井野川流域。以下、「群馬地域南部」と呼称⁽¹⁾）を基軸とした編年観の中で、その一周辺地域という位置づけで行われてきたという傾向である。先の研究動向でもいくつか触れたが、群馬地域南部の弥生後期から古墳前期の土器編年は手厚い研究によって完備されており、筆者自身も、思考基準としていつも群馬地域南部の編年が常に頭の片隅にある。こうした思考を促す要因は、この流域が「弥生後期・樽様式を保持する伝統様式地域が外来系土器の参画により、ドラスティックな様式転換を成し遂げる」地域だからであり、加えて「そのさまを解き明かした緻密な研究成果がその後の研究に多大な影響を与えている」からなのであろう。こうした先進の編年研究を拠り所として、太田地域の土器組列を行うことは、編年上の著しいトラブルを生み出すこともなく、分析作業を行っていく上での安心感がある。

しかし、この両地域をそれぞれの検証を経ずして対比させることには留意すべき点もある。それは群馬地域南部と太田地域とでは地域特性において、決定的な相違点があるということである。その点とは、両地域における弥生後期後半段階の土器様式の展開の有無の差異である。群馬地域南部に認められるような樽式土器の様式崩壊＋東海系外来土器の様式的参入というドラスティックな転換は、太田地域にはない。したがって、太田地域の古墳前期の土器様式がどのような形で萌芽し、形成され、そして展開していったか？、ということについては、この地の土器編年を構築した上で、他地域と対比する必要があるであろう。

3 編年作業のための分類

(1) 甕の分類

甕A…櫛描文施文甕 所謂「樽式系甕」である。甕Aは大別2分類、細別4分類とする。甕A1aは器面外面に櫛描文を施し、内面全体にミガキ調整を施す平底甕とし、甕A1bは同様の施文・調整を施す小型台付甕とする。甕A2aは甕A1aでの櫛描文施文が省略された甕であり、甕A2bも同様に櫛描文施文が省略された小型台付甕とする。

なお、付加的であるが、上記の分類に加えて、甕A'3と甕A'4を設定することとする。これらは、断定はできないものの、甕Aの傍流と推測される甕と判断したため、甕Aの流れの中で分類を試みた。甕A'3は「胴部がやや倒卵形を呈し、底部が胴部からやや突出する」という弥生土器的な器形的特徴と、「胴部外面にハケやミガキを密に施す」という技法の特徴とをもつ甕である。甕A'4は甕A'3と技法の特徴は同じであるが、胴部形態が球胴を呈するという器形的特徴をもつ甕である。

甕B…縄文施文・輪積み装飾甕 所謂「吉ヶ谷式系甕」である。甕Bは2分類する。甕B1は器面外面の縄文施文と口縁部の輪積み装飾を施す甕とし、甕B2は縄文施文が喪失、口縁部の輪積み装飾のみを施す甕とする。

甕C…東関東系甕 甕Cは1分類のみとする。所謂「十王台式」の流れをくむ甕であり、頸部の屈曲の弱い長胴甕で、器面外面には櫛描文によつ十王台色特有の区画文を施文する甕である。

甕D…北陸系甕 甕Dは2分類する。甕D1は口縁端部に明確な面取りを施す短い口縁と肩の張る胴部を有する北陸系甕（千種甕）とし、甕D2は直立幅広の面が特徴の口縁を有する北陸系甕（月影甕）とする。ともに胴部外面へ細かいピッチのハケを施すことが特徴である。

甕E…単口縁台付甕 甕Eは単口縁台付甕であるが、器形の細部差異と技法の差異によって5分類する。甕E1は、「口縁部直径が胴部最大径を上回る」という器形的特徴と、「口縁端部に刻み文を施

し、胴部外面へは短いピッチのハケを密に施す」という技法の特徴をもつ甕である。甕E2は、「口縁部直径が胴部最大径を下回る」という器形的特徴と、「口縁端部に刻み文を施し、胴部外面へは短いピッチのハケを密に施す」という技法の特徴をもつ甕である。甕E3は、「口縁部直径が胴部最大径を下回る」という器形的特徴と、「口縁端部への刻み文はなく、胴部外面へは短いピッチのハケを密に施す」という技法の特徴をもつ甕である。甕E4は器形的特徴と口縁端部に刻みを持たない点では甕E3と同様だが、胴部外面へのハケが雑になり、一次調整と思われるケズリが、部分的に顕在化してくる甕である。甕E5は、器形的特徴と口縁端部に刻みを持たないという点では甕E3・甕E4と同じであるが、胴部外面へのハケがほぼなくなり、ケズリがより一層顕在化してくる甕である。

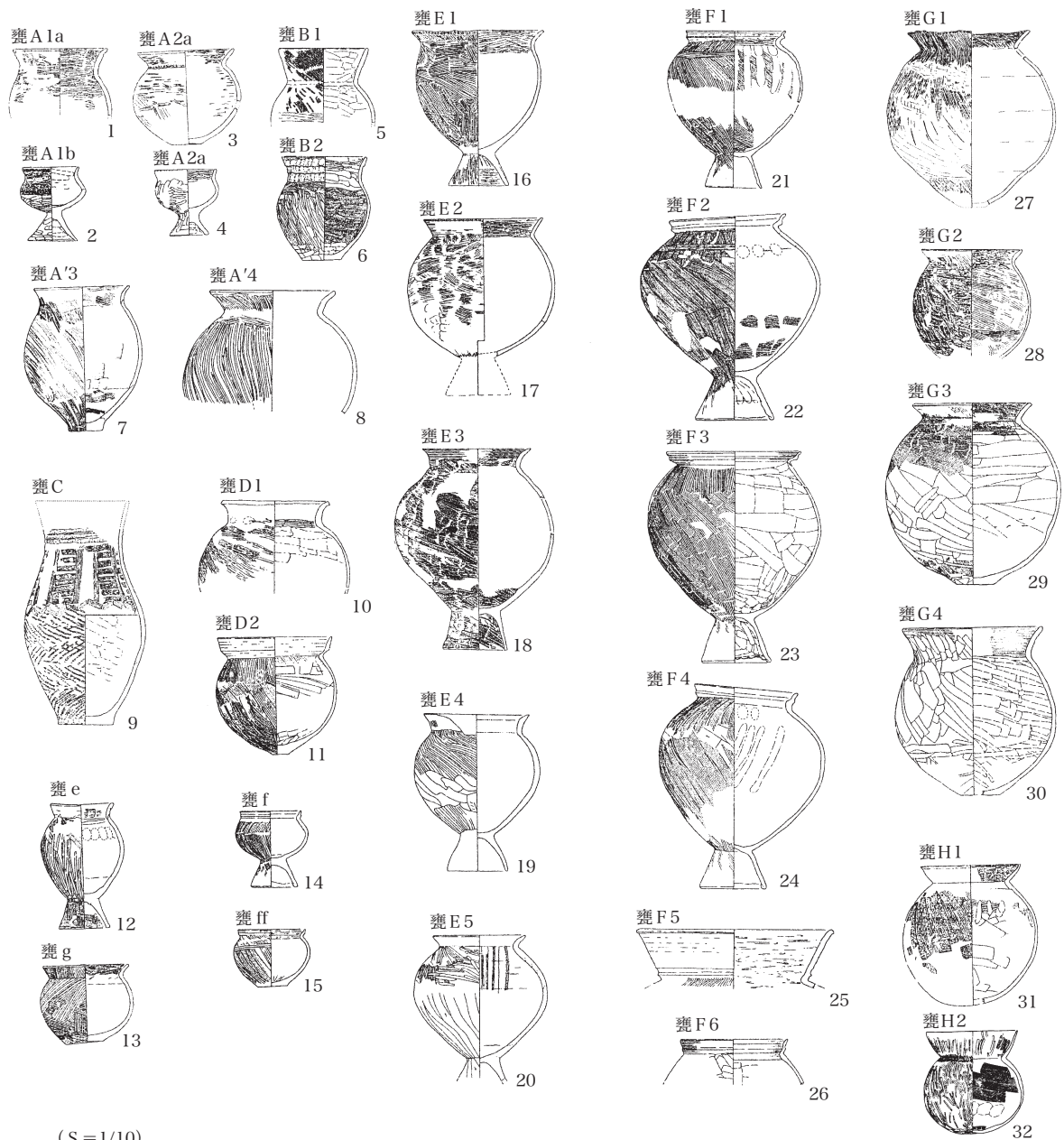
甕F…S字状口縁台付甕 甕Fは所謂「S字甕」で、器形および技法の特徴の差異から6分類する。甕F1は「S字状口縁の屈曲が内外面ともに共に明確あり、頸部は外面がくの字状に屈曲するものの、内面には幅1.0cm以下の面取りがあり、胴部は幅広の倒卵形で最大径は肩部にある」という器形的特徴と、「頸部内面へはハケ、胴部外面には2段の斜位ハケを施し、加えて肩部に横線を施す」という技法の特徴とをもつ甕である。甕F2は「甕F1に比べてS字状口縁の屈曲がやや外に開く傾向を見せる」という器形的特徴をもち、「頸部内面のハケは喪失し、肩部横線の位置がやや下がり、胴部外面にはハケ以前に一次調整としてケズリを施す」という技法の特徴をみせる甕である。甕F3は甕F2の特徴から肩部横線が喪失する甕であるが、S字状口縁の形状において、明確な屈曲を呈して外反するものや曖昧な屈曲を呈して直立気味に立ち上がるものなどディテールが多様化する特徴をもつ。甕F4は基本的には甕F3の特徴を有するが、胴部外面へ施すハケが粗くなり、それ以前に施したケズリが器面に明確に現れる」という特徴をもつ甕である。甕F5は甕F3・甕F4の特徴をもちつつ、S字状口縁が上

部に拡張付加される甕である。甕 F6 は器形的には甕 F4 と類似するが、胴部外面へのハケがなくなり、ケズリが器面の最終調整として顕在化してくる甕である。

なお、甕 F の亜種として S 字状口縁を有する小型甕がある。これについては台付甕を甕 f、平底甕を甕 ff とし、技法の特徴差異は甕 F での区分に準拠

し、「甕 f 2」「甕 ff4」などと呼称することとする。

甕 G…単口縁平底甕 甕 G は単口縁平底甕であるが、器形の細部差異と技法の差異によって 4 分類する。甕 G1 は「胴部が球胴形を呈する」という器形的特徴と、「口縁端部に刻み文を施し、胴部外面へは短いピッチのハケを密に施す」という技法の特徴をもつ甕である。甕 G2 は「胴部が球胴形を呈す



(S=1/10)

1・5・9・28…成塚向山古墳群 2・4…西長岡東山古墳群 3・8・13・16・17・27…重殿 6・30…成塚住宅団地 7…上
10…高林三入 11・21・25…下田中 12・14・20・22・24…中屋敷・中村田 15…矢場 18…磯之宮 19…中屋敷東 23…
唐桶田 26…中西田 29…間之原 31…富沢古墳群 32…東今泉鹿島

図1 甕 分類図

る」という器形的特徴と、「口縁端部への刻み文はなく、胴部外面へは短いピッチのハケを密に施す」という技法の特徴とをもつ甕である。甕 G3 は基本的には甕 G2 の特徴を有するが、胴部外面へ施すハケが粗くなり、それ以前に施したケズリ、或いはナデが器面に明確に現れる」という技法の特徴をもつ甕である。甕 G4 は甕 G3 と類似するが、器面外面へのハケがなくなり、ケズリが器面の最終調整として顕在化する甕である。

なお、甕 G の亜種として小型平底甕がある。これについては甕 g とし、技法の特徴差異は甕 G による区分に準拠し、「甕 g1」「甕 g4」などとする。

甕 H…内湾口縁甕 甕 H は、所謂「布留甕」の流れをくむ甕であり、2 分類する。甕 H1 は「やや内湾気味に外斜する口縁部と、球胴で丸底」という器形的特徴を有し、「胴部外面へは細かいハケを施し、胴部内面へはヘラケズリを施す」という技法の特徴をもつ甕である。なお、甕 H1 において良く認められる特徴には口縁端部内面の僅かな肥厚化も挙げられる。甕 H2 は、「やや内湾気味に外斜する口縁部と、球胴で平底」という器形的特徴を有し、「胴部外面へはハケやミガキを施す」という技法の特徴をもつ甕である。

(2) 壺の分類

壺は大型品が多く、出土資料としての完形品が少ない。こうした資料的制約があるため、壺 F 以外は器形的特徴の差異を重視して分類を行った。

壺 A…櫛描文施文壺 (樽式系壺) 壺 A は 1 分類とし、櫛描波状文・廉状文・羽状文壺を総じて扱う。

壺 B…縄文施文壺 (吉ヶ谷式系壺) 壺 B は 1 分類とし、縄文施文の壺とする。

壺 C…折り返し口縁壺 壺 C は折り返し口縁をもつ壺であり、器形的特徴の差異から 4 分類する。壺 C1 は、長く、直線的に外斜する口縁部をもつ壺である。壺 C2 は壺 C1 に比して口縁部が短くなる壺である。なお、壺 C2 では折り返し部が不明瞭となり肥厚口縁状を呈する壺も認められる。壺 C3 は口縁部の外斜度合いがさらに強く、外反気味になって

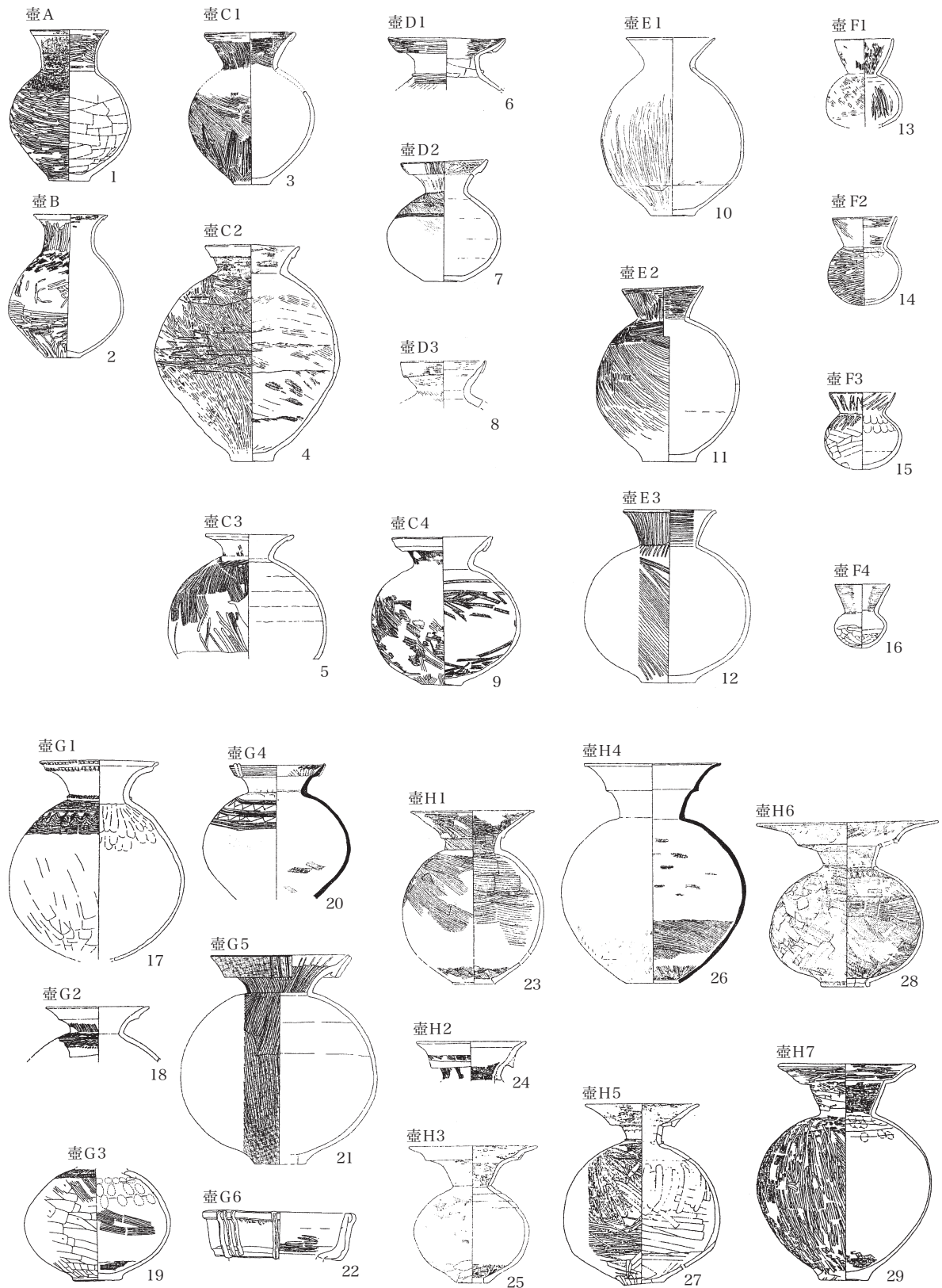
いき、胴部が球胴形を呈する壺である。この壺 C3 においても壺 C2 の場合と同様、肥厚口縁状になる壺もある。壺 C4 は折り返し部が断面四角状を呈し、明確な稜線をもち、胴部が球形を呈する壺である。

壺 D…有段口縁壺 壺 D は口縁部が屈曲して開き、その屈曲部が口縁部内面においても明確に認められるという特徴をもつ壺であり、器形的特徴の差異から 3 分類する。壺 D1 は口縁部と頸部の屈曲が明確に区分でき、とりわけ直立気味の頸部から屈曲して大きく開く口縁部に至る壺である。壺 D2 は頸部の外反が進行し、壺 D1 で認められた口縁部と頸部の屈曲が曖昧になる壺である。壺 D3 は口縁のつくりや文様施文等が簡略化される壺である。

壺 E…単口縁壺 壺 E は単口縁壺であり、器形的特徴の差異から 3 分類する。壺 E1 は、長く、直立気味に外斜する口縁部と、やや長胴で最大径を胴部下位にもつ壺である。壺 E2 は壺 E1 と類似するが、最大径を胴部のほぼ中位にもつ壺である。壺 E3 は壺 E2 に比べて外斜具合もきつく、外反気味になる口縁部と、胴部が球胴形を呈する壺である。

壺 F…長頸壺 壺 F は小・中型を主体とする長頸壺であり、4 分類する。壺 F1 は最大径を胴部下位にもち、器面調整にミガキを多用する壺である。なお、残存する例が少ないものの、壺 F1 の口縁部はやや内湾気味に直立する口縁を持つ場合が多い。壺 F2 は直立気味に開く口縁と、最大径を胴部中位にもち、器面調整としてミガキを多用する壺である。壺 F3 は口縁は直立気味に開き、最大径を胴部上～中位にもち、器面調整としてミガキに加えて、ケズリを用いる壺である。壺 F4 は直立気味に開く口縁と、最大径を胴部上～中位にもち、器面調整としてケズリを多用する壺である。

壺 G…複合口縁壺 壺 G は、器形的特徴と文様施文特徴から 4 分類する。壺 G1 は口縁端部がつまみあげられ、胴部は球胴を呈する器形的特徴と口縁端部への刻み文と、胴部上半への櫛描横線文・波状文という文様の特徴が認められる壺である。壺 G2 は口縁部から頸部にかけて外反するが、頸部と口縁



(S=1/10)

1・2…西長岡東山古墳群 3・7・11…重殿 4・6・9・13・17…槍花 5…中屋敷東 8…中溝深町 10…上 12・21
 …ハツ縄 14・19・22・24…中屋敷・中村田 15…矢場 16・28…成塚住宅団地 18…中溝II 20・26…御正作 23…前六供
 25…屋敷内B 27…細田 29…東今泉鹿島

図2 壺 分類図

部の境界が外面のみの屈曲によって認識できするという器形的特徴と、口縁部下位外面には縦方向のハケが施され、胴部外面には櫛描波状文の施文とその下位に連続刺突文が施されるという文様の特徴が認められる壺である。壺 G3 は口縁形状は不明瞭だが、胴部上位に櫛描横線文をもつ有文壺である。壺 G4 は口縁端部は粘土帯貼り付けによりやや外斜した広い面を形成する外反口縁と、球形胴を呈するという器形的特徴と、口縁内面への刺突による綾杉文風の施文および胴部上位外面への櫛描横線文と山形文の施文という文様の特徴が認められる壺である。また、壺 G5 は壺 G4 が無文化した壺である。壺 G6 は幅広で直立する口縁部に棒状浮文が貼付される大型壺である。

壺 H…二重口縁壺 壺 H は 7 分類する。壺 H1 は頸部が直立またはやや外斜気味に直立し、屈折して口縁部が開く壺である。壺 H2 は口縁部中位外面に粘土帯を貼付することで、有段口縁を形作っている壺である。壺 H3 は口縁から頸部までが二重に外反して開く壺である。壺 H4 は壺 H3 と同様に二重に外反する口縁を有するが、壺 H3 に比して、口縁部の伸長化が認められる壺である。壺 H5 は口縁部と頸部の境界に明確な屈曲と平坦面を有し、頸部がほぼ直立する壺である。壺 H6 は口縁部と頸部の境界に明確な屈曲と平坦面を有するものの、壺 H5 に比して頸部がやや外斜気味になる壺である。壺 H7 は壺 H6 に比べて頸部が伸長化した壺である。

(3) 高坏の分類

高坏 A…単口縁鉢形高坏 高坏 A は、「単口縁鉢状に開く坏部、ハの字状に開く脚部」という器形的特徴と、器面全体に丁寧なミガキを施す高坏であり、2 分類する。坏部下位に稜を有さないものを高坏 A1、弱い稜を有するものを高坏 A2 とする。

高坏 B…小型碗形高坏 高坏 B は、碗形の坏部を有する小型高坏であり、2 分類する。裾部が大きく開く脚部を有するものを高坏 B1、直線的に開く脚部を有するものを高坏 B2 とする。

高坏 C…小型無稜高坏 高坏 C は「ハの字状に

開く小型の坏部、裾部が大きく開く脚部」という器形的特徴をもつ小型高坏であり、2 分類する。坏口縁端部内面の面取りが明確なものを高坏 C1 とし、それ以外のものを高坏 C2 とする。

高坏 D…小型有稜高坏 高坏 D は「下半に稜を有する坏部、裾部が大きく開く脚部」という器形的特徴をもつ小型高坏であり、2 分類する。坏口縁端部内面の面取りが明確なものを高坏 D1 とし、それ以外のものを高坏 D2 とする。

高坏 E…大型開脚高坏 高坏 E は「大きく開く坏部と、裾部が広がる脚部」という器形的特徴をもつ高坏であり、2 分類する。坏口縁端部内面に面をもつなど端部の仕上げが丁寧であるものを高坏 E1、坏口縁端の仕上げが丸く収まる程度のものを高坏 E2 とする。

高坏 F…屈折脚高坏 高坏 F は「有稜の坏部と、柱状脚部で裾部が屈曲する」という器形的特徴をもつ高坏であり、4 分類する。このうち、細身の柱状脚部にヨコミガキを施すものを高坏 F1、細身の柱状脚部の下半分程度のみが中空になっている高坏を高坏 F2、やや裾広がりの中空柱状脚部をもつものを高坏 F3 とする。さらには、高坏 F3 に類似するものの、坏部がさらに大きくなり、坏部下位の稜も明確化し、裾部の屈折もより明確になるものを高坏 F4 とする。

(4) 器台の分類

器台 A…外斜器台 器台 A は受け部が外斜するものとし、3 分類する。受け部が直線的に開き、受け部の深さが浅いものを器台 A1、受け部が直線的ではあるものの、やや碗形気味に開き、受け部の深さが深めのものを器台 A2、浅い碗形でその下位に弱い稜を有するものを器台 A3 とする。

器台 B…有稜器台 器台 B は受け部に明確な屈曲を有する器台とし、2 分類する。受け部の口縁部が直線的に短く開き、体部との間に稜を有するものを器台 B1、受け部の口縁部が外反して短く開き、体部との間に明確な稜を有するものを器台 B2 とする。

器台 C…結合器台 器台 C は所謂「北陸系器台」と呼ばれる器台であり、3 分類する。明確に外屈して開く受け部に鋳が付かないものを器台 C1、やや弱く外屈する受け部に大きな鋳がつくものを器台 C2、屈折部がなく外反する受け部に僅かな突起状の鋳がつくものを器台 C3 とする。

(5) 鉢の分類

鉢 A…単口縁鉢 鉢 A は単純に開く口縁～体部を有する鉢であり、2 分類する。直線的に開き、平底を呈するものを鉢 A1 とする。やや内湾気味に開き、平底を呈するものを鉢 A2 とする。

鉢 B…頸部屈曲鉢 鉢 B は、「大きく開く口縁部、くの字状に屈曲する頸部、やや縦づまりの球胴形を呈する体部」という器形的特徴をもつ鉢であり、2 分類する。このうち、頸部位置が器高上～中位にあ

るものを鉢 B1、頸部位置が器高の下位にくるものを鉢 B2 とする。

鉢 C…有段口縁鉢 鉢 C は口縁部が屈曲する段をもって開き、浅い体部を呈する鉢である。

鉢 D…直立口縁鉢 鉢 D は短く直立する口縁部で有稜の浅い体部を有する、平底を呈する鉢である。

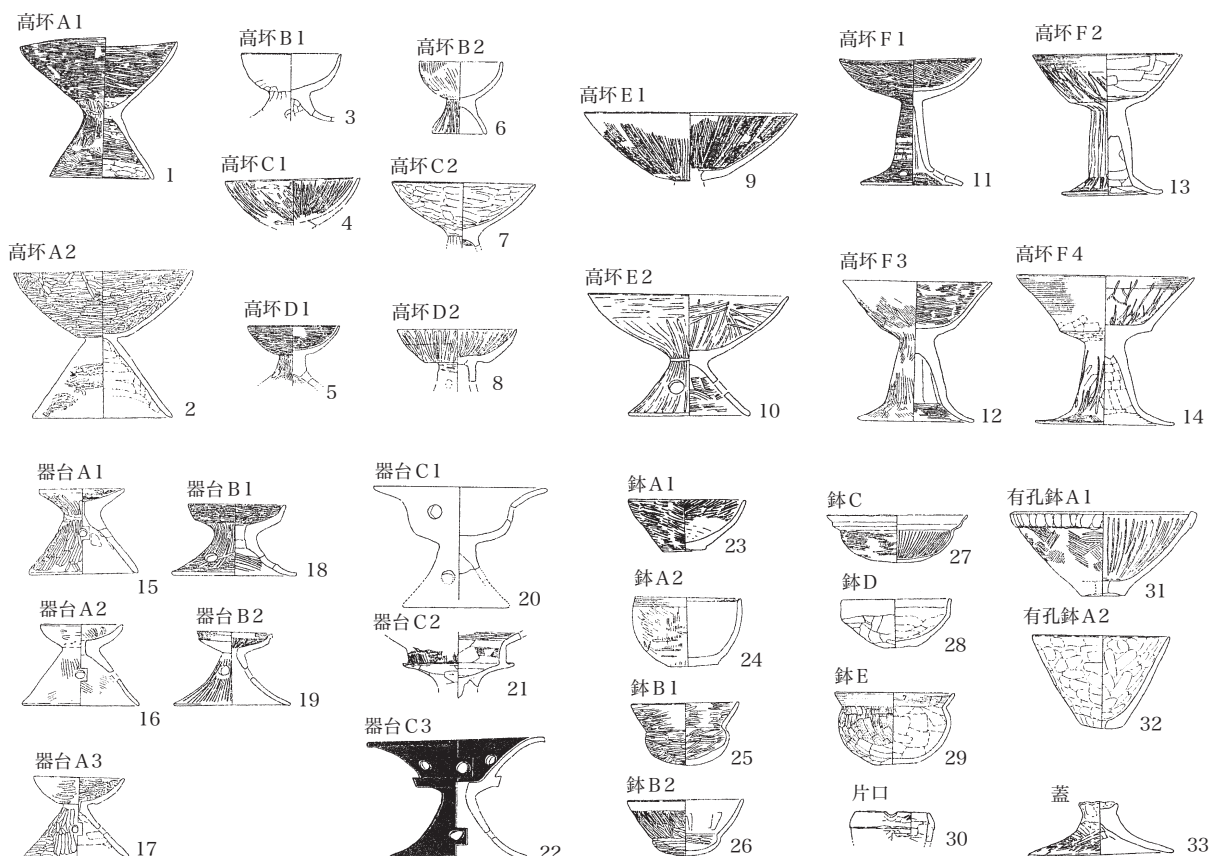
鉢 E…碗形鉢 鉢 E は口縁が短く開き、頸部の位置は器高の上位にあり、縦づまりの球胴で平底を呈する鉢である。

(6) 有孔鉢の分類

有孔鉢 A…単口縁有孔鉢 単孔の有孔鉢であり、2 分類する。折り返し口縁のものを有孔鉢 A1、単口縁のものを有孔鉢 A2 とする。

(7) 片口・蓋の分類

片口・蓋はそれぞれ 1 分類として扱うこととする。



(S=1/8)

1・5・7・30・32…成塚向山古墳群 2・15・17…西長岡東山古墳群 3・21…槍花 4・9・16・23・33…中溝深町
6・19・20・22・24・31…重殿 8・10…下田中 9・27…一本杉II 11・26…中屋敷・中村田 12…東今泉鹿島 13…間之原
14・29…成塚住宅団地 18…台 25…矢場 28…高林三入

図3 高坏・器台・鉢・有孔鉢・片口・蓋 分類図

4 型式変化の仮説

(1) 全形式通有の型式変化の仮説

太田地域に認められる古墳前期土器様式(＝石田川様式)は各形式とも外来属性が搬入し、それを在地受容することで形成された土器様式である。よつ各形式においては抽出できる、外来諸属性は「故地の型式の忠実な模倣」から「簡略的な模倣」、さらには「在地独自の変容」という変化(若狭 1998・2000)で捉えることができ、こうした「模倣程度の変化」《変化視点0》を通有の視点とする。

(2) 甕における型式変化の仮説

甕は従来の編年研究において基軸形式とする場合は多く、ゆえに型式変化の仮説が立てやすい。

S字甕の場合、型式変化(田口 1981・2000)の指標のひとつに「胴部外面へのケズリの顕在化(＝ハケの省略化)の進行」《変化視点1》がある。この変化視点は当該地域における甕にも有効な変化視点であるとして仮説検証を進める。また、樽式および樽式系甕の変化(若狭 1990)、吉ヶ谷式系甕の型式変化(若狭 1990、深澤 1999)として、「器面装飾の有文から無文へ」《変化視点2》、「頸部の緩やかな屈曲から鋭い屈曲へ」《変化視点3》、「胴部最大径位置の下降に伴う、長胴から球胴へという変化」《変化視点4》があり、これらも有効な変化視点として、仮説検証を進めることとする。

甕Aおよび甕Bでは既研究(若狭 1990、深澤 1999)に準じ、主に《変化視点2・3》から「甕A1→甕A2・甕A'3・甕A'4」「甕B1→甕B2」、《変化視点4》から「甕A'3→甕A'4」という型式変化が仮説としてそれぞれ立てられる。甕Eでは《変化視点1・2・3》から「甕E1→甕E2→甕E3→甕E4→甕E5」という型式変化の仮説が立てられる。甕Fでは既研究(田口 1981・2000)を参考とし、《変化視点1》を重視することから「甕F1→甕F2→甕F3→甕F4→甕F6」という型式変化を設定することができる。甕Gでは《変化視点2》から「甕G1→甕G2」という型式変化の仮説が立てられる。さらに《変化視点1》から「甕G2→甕G3→甕

G4」という型式変化の仮説が立てられる。さらに甕Hは《変化視点0》から「甕H1→甕H2」という型式変化の仮説が立てられる。

なお、甕C・甕Dは出土数が少量のため、型式変化の仮説は立てることは本稿では行わない。

(3) 壺における型式変化の仮説

壺においても伊勢型二重口縁壺やパレススタイル壺の編年研究(田口 1981・田口 1987)において先述の《変化視点2》が認められ、加えて「胴部最大径位置の上昇に伴う、長胴から球胴へという変化」《変化視点5》が認められることから、これらを仮説検証の視点とする。また、樽式および樽式系壺の変化(若狭 1990)、吉ヶ谷式系壺の変化(若狭 1990、深澤 1999)で認められる「胴部中位の張りが強く算盤玉状を呈する胴から、球胴へという変化」《変化視点6》も仮説検証の視点とする。さらに、《変化視点3》に伴う「口縁部の外反度合いの進行」《変化視点7》や、また、「口縁の伸長化」《変化視点8》も仮説検証視点とする。《変化視点0》に基づき、東海西部の長頸壺における「内湾気味の口縁から直線的に開く口縁への変化」《変化視点9》も壺の型式変化の仮説検証視点のひとつとする。

壺Cでは《変化視点6・7》から「壺C1→壺C2→壺C3」という型式変化の仮説が立てられる。壺Dでは《変化視点0・7》から、「壺D1→壺D2→壺D3」という型式変化の仮説が立てられる。壺Eでは《変化視点5・7》から、「壺E1→壺E2→壺E3」という型式変化の仮説が立てられる。壺Fでは《変化視点5・9》、さらには甕で用いた《変化視点1》も加味すると、「壺F1→壺F2→壺F3・壺F4」という型式変化の仮説が立てられる。壺Gでは《変化視点2》から、「壺G4→壺G5」という型式変化の仮説が立てられる。壺Hでは、《変化視点7》から、「壺H3→壺H4」という型式変化の仮説が、《変化視点8》から、「壺H6→壺H7」という型式変化の仮説がそれぞれ立てられる。

なお、壺A・壺Bは出土量が少なく、変化の方向性が把握しづらいため、変化仮説を立てない。

(4) 高坏における型式変化の仮説

高坏では、丁寧なつくりから簡略的なつくりへとという指向が、坏部での「内面に面をもつ口縁端部から、そうでない口縁端部へという変化」《変化視点 10》という型式変化を生み出している。また「脚部が柱状でやや中実気味のものから、柱状でありつつもやや裾が開き、中空のものへ変化」《変化視点 11》も型式変化の仮説として想定する。

高坏 C・高坏 D・高坏 E は《変化視点 10》から「高坏 C1 → 高坏 C2」「高坏 D1 → 高坏 D2」「高坏 E1 → 高坏 E2」という型式変化が想定される。高坏 F は《変化視点 0》から「高坏 F1 → 高坏 F2・F3」という変化が、さらに《変化視点 11》から「高坏 F2 → 高坏 F3・F4」という変化が想定される。

(5) 器台における型式変化の仮説

器台では、受け部の変化において、「直線的にひらくものから碗形を呈するものへの変化」《変化視点 12》、さらには口縁部と体部の境界を明確にしていく指向を反映して、「受け部における稜線の明確化が進行していくという変化」《変化視点 13》をそれぞれ仮説としてたてる。

《変化視点 12》に基づけば、「器台 A1 → 器台 A2」という型式変化が、また《変化視点 13》に基づけば、「器台 B1 → 器台 B2」という型式変化がそれぞれ想定される。さらに、器台 C では《変化視点 0》から、「器台 C1 → 器台 C2 → 器台 C3」という型式変化（熊野 1974・1977・1980）が想定される。

(6) 鉢における型式変化について

鉢については「口縁部の伸長化とそれに連動する体部の縮小化」という指向を反映して「屈曲する頸部位置の下方への移行変化」《変化視点 14》という型式変化を想定してみる。

この《変化視点 14》に基づけば、鉢 B では「鉢 B1 → 鉢 B2」という型式変化が仮定される。

なお、鉢 A・鉢 C・鉢 D・鉢 E については、型式変化の方向性が把握しづらいため、本稿で変化仮説を立てないこととする。

(7) 有孔鉢・片口・蓋について

これらについては、本稿においては型式変化の仮説を立てないこととする。

5 画期の抽出と各期の様相

(1) 共伴関係に基づく型式変化の検証結果

集落遺跡出土土器については、共伴性が高い資料を抽出し、その組合せ関係をまとめ、変化仮説に基づく型式変化の信憑性を検証した（表 1）。その結果は一覧表（表 3）の通りであるが、大局的には、各形式の型式変化の関係に逆転するものがないことから、当該地域の古墳前期土器編年を案じていくにはこれらの変化仮説は一定の有効性があると言える。

一方、墳墓出土土器についても、集落遺跡出土土器と同様、組合せ関係をまとめ（表 2）、その変化推移について一定の結果を得て、有効性は確認できた（表 4）。但し、墳墓という遺構の特性上、出土形式の偏在性は顕著であり、分類と組合せに基づく本稿の検証作業においては不備が生じたことを認めざるを得ない。故に、その検証に際しては、集落出土土器の検討で抽出された画期と指標を目安とし、それに対比させる形で変化推移をうかがうこととした。

(2) 画期の抽出

上記の結果から、3つの画期と、2つの可能性としての画期（以下「可能性画期」）を抽出することができる。なお、ここでの抽出は、集落遺跡出土土器を基準とする。明確な画期は次の通りである。

第 1 の画期 櫛描文系および縄文施文系土器の衰退と、東海系土器の組成への主体的参画開始という 2つの現象によって抽出できる画期である。

第 2 の画期 甕におけるケズリ技法の顕在化と、明確な二重口縁壺・屈折脚高坏の出現という現象によって抽出することができる画期である。

第 3 の画期 器台や二重口縁壺といった古墳前期的土器形式の衰退と、各形式における特定型式（＝中期的型式）への収斂という現象によって抽出することができる画期である。

これらの 3つの画期のうち、第 1・2 の画期によって、太田市域の古墳前期土器は 3期区分され、第 3

表1 集落遺跡出土土器における共伴関係

[illegible]

表2 墳墓出土土器における共伴関係

期	墳墓名 ()内は規模:m	甕																壺														高坏				器台				鉢						
		A1	B2	E3	E4	F2	F3	F4	f	G2	G3	G4	g	H	A	B	C2	C4	E1	E2	E3	F1	F2	F3	F4	F5	G1	G5	H1	H3	H5	H6	DE	F2	F3	A1	A2	B1	B2	C2	B1	B2	C			
1期	西長岡東山3号墓 (円7)	●												●	●	●					●	●														◆										
2 〜 3期	槍花1号墓 (方13)				△		○				△						●					●	●					●									◆					●				
	槍花4号墓 (方16)					△			f3			△							○	●			●																							
	槍花5号墓 (方10)																																													
3期	前六供1号墓 (方方42)							●														●								●								●								
	御正作1号墓 (方17)							●													●	●	●							●					※1	◆			●				●			
	御正作2号墓 (方17)							●						●	②							●	●	●														●	●			●	●			
	八ッ縄1号墓 (方9)																						●						●																	
	屋敷内B墓 (方28)									f6				※2				●																								※1		●		
	槍花3号墓 (方13)									f6				②								●																								
	槍花7号墓 (方8)									f6								●				●																								
	細田2号墓 (方12)																																													
	成塚住宅団地C1号墓 (方10)	●											●	●	4						●			●	●	●																				

○…残存型式 ◆…類似型式 △…台付き or 平底の区別つかず

枠内の数字は分類数字 ※1…複数型式の区別つかず ※2…底部は焼成前穿

○…残存型式 ◆…類似型式 △…台付き or 平底の区別つかず 枠内の数字は分類数字 ※1…複数型式の区別つかず ※2…底部は焼成前穿孔

の画期によって、古墳前期土器と中期土器との区分がなされることと考える。

また、可能性画期は次の通りである。

可能性画期 A 所謂「東海系土器・北陸系土器」の各形式への参画開始が挙げられる。この可能性画期 A は、共伴関係の検証結果(表1)から「第1の画期」以前の段階で抽出できそうな画期である。但し、現状では可能性に留まる理由としては、「第1の画期以前」での樽式系甕(甕 A1・A2)と S 字甕(甕 F1)との時系列的前後関係が、現状では明確に把握できないからである。

可能性画期 B 2つめの画期は、S 字甕の衰退と、ケズリ手法が顕在化する平底甕の参画が挙げられる。この可能性画期 B は、共伴関係の検証結果(表1)から「第2の画期以降、第3の画期以前」の段階で抽出できそうな画期である。但し、このことが現状では可能性に留まる理由としては、「第2の画期以降、第3の画期以前」での S 字甕(甕 F3・F4)と平底甕(甕 G3・G4)の時系列的前後関係が、現状では明確に把握できないからである。

なお、この2つの可能性画期については、今後の資料増加や再検討により、明確な画期抽出がなされることを期待し、現状では課題として止めておく。

墳墓出土土器における追記事項 墳墓出土土器による画期抽出の検証結果において、先に述べた集落出土土器によるものと相違する箇所について、追記事項として述べておく。

墳墓出土土器の場合、壺が多く、甕が少ないという点が集落出土土器との最も異なる点である。ゆえ

に、甕における属性変化に画期抽出の指標の多く求めている先述の設定画期の検証は、必ずしも墳墓出土土器においては十分なものとは言えない。

その1つめの現れは「第2の画期」における曖昧さにある。第2の画期については、その指標に「甕におけるケズリ技法の顕在化と、明確な二重口縁壺・屈折脚高坏の出現」を挙げて画期性を求めた。だが、墳墓出土土器では、出土量の少なさから甕におけるケズリ技法の「顕在化」抽出できていないことや各期を通じ高坏の出土頻度が低いため、屈折脚高坏の出現という現象が相対的に把握しにくいことなどがあり、画期性を曖昧にせざるを得ない。よって、前六供1号墓での甕 F や壺 H、槍花1号墓での甕 F には幅を持った位置づけが現状では必要である。

また、2つめの現れは「第3の画期」自体の抽出の困難さである。成塚住宅団地 C 工区1号墓での壺 F4 の存在から、その画期性を認めたいのはやまやまである。だが、現状での資料の極少性からは壺 F4 自体の評価も含め、第3の画期については、保留としておくことが妥当と思われる。

(3) 各期の様相

1期 外来系土器登場による在地様式の萌芽期

1期は、様々な地域に出自を持つと思われる、いわば外来要素を備えた土器(=外来系土器)がこの地に存在しはじめる段階である。

その存在のしかたは、特定の形式が単発的にあるという状況ではなく、複数の形式が存在するという状況を呈するものである。そして、その出揃う姿には、古墳前期を通じて認められる形式構成の姿を読

第9章 考察

み取ることができ、新様式の成立の兆しが認められ、さらに、その出揃い方には、出自が異なる外来系土器の混在性が看取でき、在地における型式の取捨選択（＝型式の在地化）が明確に見いだせない。よって、こうした状況からは、1期を「様式的展開の萌芽期」としての段階に止める必要性が感じられる。

この展開萌芽期の顕著な特徴は、各形式における外来要素の主体が東海系および南関東系である一方で、甕・壺・高坏・鉢において樽式系・吉ヶ谷式系などの弥生後期的様相が、客体的ではあるがその存在感を示している点にある。また、北陸系の要素も明確な姿が認識できるのはこの1期だけである。

【1期の甕】甕 A1・甕 A2・甕 A'3・甕 B1・甕 C・甕 D1・甕 D2・甕 E1・甕 F1・甕 G1・甕 G2・甕 g4 が認められる。これらは、その主体性が2分し、甕 A・甕 B を主体とするもの（存在形態1）と、甕 F・甕 G を主体とするもの（存在形態2）とに区分できる。存在形態1の甕は樽式系甕や吉ヶ谷式系甕であり、その型式は各様式の末期的なものである（若狭 1990、深澤 1999）。一方、存在形態2の甕は東

海西部または南関東系の甕をプロトタイプとする甕であり、これらの場合はプロトタイプが古相を呈しているという特徴をもつ。また、客体的存在である甕については、甕 C が存在形態1に、甕 A'3・甕 D1・甕 D2・甕 E1 が存在形態2に、それぞれ伴う傾向が認められる。なお、1期のみに存在主体が認められる甕として、甕 A～D が挙げられる。このうち、甕 A～C は近隣地域の弥生後期甕の末期的型式の甕と考え、故に本期での存在衰退も理解しやすい。しかし、北陸系甕である甕 D は、北関東の弥生後期甕の中においては皆無に近いほどの出土事例しかなく、甕 A～C との存在性に明確な差異を抽出できる。

【1期の壺】壺 A・壺 B・壺 C1・壺 D1・壺 D2・壺 E1・壺 F1・壺 F2 が認められる。

樽式系壺である壺 A の存在は1期のみ、吉ヶ谷式系壺である壺 B の存在は1期に主体があり、次期の存在は極めて客体的である。折り返し口縁壺である壺 C1 は、口縁外斜度も弱く、比較的長い口縁という属性を具備している。なお、この壺 C1 は、

表3 集落遺跡出土土器における形式毎の消長

分類	甕																											
	A1	A2	A3	A4	B1	B2	C	D	E1	E2	E3	E4	E5	e	F1	F2	F3	F4	F5	F6	f	G1	G2	G3	G4	g	H	
1期	●	●	●		●		●	●	●													●	●				●	
2期	○	▲	●	●	●	▲	●	○		●	●				○	●					●	▲	▲				●	
3期						▲					●	●	●	●		○	●	●	●	●		●	●	●	●	●	●	
4期																								●	●	●		

分類	壺																器台										
	A	B	C1	C2	C3	C4	D1	D2	D3	E1	E2	E3	F1	F2	F3	F4	F5	G	H	A1	A2	A3	B1	B2	C1	C2	C3
1期	●	●	●				●	●		●	●		●							●	◆	●			●		
2期		●		●					●	●	●			●				▲	▲	○	●	▲	▲			●	
3期				○	●	▲						○	●		●			●	●			●	●				●
4期												●					●	●									

分類	高坏														鉢							有孔鉢		甌	片口		
	A1	A2	B1	B2	C1	C2	D1	D2	E1	E2	E3	F1	F2	F3	F4	A1	A2	B1	B2	C	D	E	A1	A2			
1期	●	●	●		●		●		●	●	●					●	●						●	●			●
2期			●	●	●	●		●	●	●	●					●	●	●					●	●			
3期						●						●	●		●		●	●		●			●	●			
4期														●	●						●	●			●		

●…存在する ○…残存タイプが存在する ◆…類似タイプが存在する ▲…現状での共伴資料は不明瞭だが、存在の可能性が大

表4 墳墓出土土器における形式毎の消長

分類	甕												高坏			器台			鉢
	A1	B2	E3	E4	F2	F3	F4	f	G2	G3	G4	g	DE	F2	F3	A1	B2	C2	C
1期	●											●				◆			
2期			●↓	▲↓	●↓	●↓		●↓	●↓		▲↓	▲				●↓		●↓	
3期		●	●		●	●	●	●		●	●	●	●	◆	●		●		●
4期																			

分類	壺																		
	A	B	C2	C4	E1	E2	E3	F1	F2	F3	F4	F5	G1	G4	H1	H2	H3	H4	H5
1期	●	●			●			●	●										
2期			●			●			●				●↓		●↓				
3期				●			●		●	●	●↓	●↓		●		●	●	●	●
4期																			

- … 集落遺跡で存在
- … 存在
- ◆ … 類似タイプが存在
- ▲ … 存在の可能性あり
- ↓ … 次期の可能性あり

無文化する樽式壺（若狭 1990）という理解も可能な壺である。単口縁壺である壺 E1 は口縁の外反も顕著でなく、胴部も下ぶくれ傾向や長胴傾向を残す器形的特徴を具備する。壺 D1 は頸部と口縁部が明確に屈曲を呈する特徴を具備し、壺 D2 は壺 D1 が型式変化したものと考えられる。また、長頸壺の壺 F1 は胴部最大径が下半に位置するという器形的特徴をもつ壺であり、加えてやや球胴を指向する壺 F2 も垣間見える。

壺に関しては、壺 D および壺 F を除けば、比較的、北関東の弥生後期系の要素を保持している傾向にあり、このことが 1 期の壺における特徴といえる。

【1 期の高坏】高坏 A1・高坏 A2・高坏 B1・高坏 C1・高坏 D1・高坏 E1 が認められる。1 期の主体は東海系高坏の系統で理解できる高坏 B1・高坏 C1・高坏 D1・高坏 E1 である。これら外来系高坏は口縁端部の丁寧な調整などが共通して認められる特徴である。なお、弥生系の高坏である高坏 A1 は客体的存在にすぎない。

【1 期の器台】器台 A1・器台 A2・器台 A3・器台 C1 が認められる。外斜器台である器台 A1 が主体的であり、また、北陸系である器台 C1 は故地の形態に近く、次期以降には認められないものである。

【1 期の鉢】鉢 A1・A2 で構成される。

【1 期の有孔鉢・片口】有孔鉢は有孔鉢 A1・有孔鉢 A2 が共存、片口も存在する。

【1 期の標識土器群】1 期の構成土器は、甕の様相で区分した「存在形態 1」と「存在形態 2」では異なる。「存在形態 1」では甕 A・甕 B・壺 A・壺 B・高坏 A で主に構成されるのに対し、「存在形態 2」では甕 A・甕 F・甕 G・壺 C・壺 E での構成傾向が認められ、相違する。この両者には壺 F・高坏 C・高坏 D・器台 A・鉢 A など共通する要素も多いものの、差異がある。この 2 者の差異については、時間的な先後関係を把握することは断定できないが、壺 C1 や壺 E1 を壺 A・壺 B が無文化した壺とという理解を仮定すれば、「存在形態 1→存在形態 2」という先後関係の可能性もありうる（可能性画期 1）。

1 太田地域における古墳時代前期の土器編年試案

全ての要素を具備した一括遺物は皆無だが、その傾向を多分に見いだせる標識土器群としては、次のものが挙げられる。「存在形態 1」としては西長岡東山古墳群 3 号住居・成塚向山古墳群 7 号住居・西長岡東山古墳群 3 号円形周溝墓出土土器が挙げられ、「存在形態 2」としては、下田中遺跡 4 号住居・一本杉 II 遺跡 25 号井戸・重殿遺跡 4 号住居出土土器が挙げられる。

2 期 東海系土器の定着による在地様式の形成期

2 期は、1 期においてこの地に登場しはじめた各種外来系土器が、あるフィルターを経て、主に東海系要素が抽出された上で在地化しはじめ、独自の土器様式を形成しはじめていく段階である。だが、その形成段階でありながらも、各形式においては 1 期における型式が変化したものが多い、鉢 B1 以外是新形式の出現は認められない点が特徴といえる。

【2 期の甕】甕 A1・甕 A'3・甕 A'4・甕 B1・甕 C・甕 D1・甕 D2・甕 E2・甕 E3・甕 F1・甕 F2・甕 f・甕 G1・甕 G2・甕 g が認められる。存在する型式は多いが、その主体は甕 A'4・甕 E3・甕 F2 である。

次期において圧倒的主体存在となる甕 F は 2 期の甕 F2 において、東海地域の S 字甕とは異なる変化を始める傾向が認められ（原田 1996）、在地化開始の様相を示す本期の特徴的な型式と言える。加えて、甕 f の存在も、本期における甕 F の在地化の表象（加納 1990）と理解できる。

単口縁平底甕である甕 A'4 は球胴形を志向していることから甕 A'3 との差異が認められる。また、甕 E3 は、甕 E1・甕 E2 に認められた口縁端部の刻み文の存在が皆無となり、単純なハケ調整主体をなす。なお、甕 A1・甕 B1・甕 C・甕 D1・甕 D2 は極めて客体的な存在にすぎず、1 期の残存型式という位置づけが適当である。

このように、1 期において存在した弥生後期系の甕の存在が皆無に近い状態になることも、2 期に至り、その土器群が古墳前期の様式として形成されはじめたことを示す状況として見て取れよう。

【2期の壺】壺B・壺C2・壺D3・壺E1・壺E2・壺F1・壺F2が認められる。

今回の検討資料はこの期の資料が希薄のため、明確な主体的存在を認めることは困難だが、主体的な傾向を予想できるものとしては壺C2・壺E1・壺E2・壺F2があげられる。いずれも、1期において構成された型式が変化したものである。折り返し口縁壺である壺C2と単口縁壺である壺E2はともに口縁の外斜と短小化という型式変化を経たものである。さらに、壺D3も単口縁壺と同様に口縁部の特徴として外斜かつ短小化の傾向を見いだすことができ、壺F2も型式変化を経たものが主体となる。このように2期の壺は1期から存在する壺が一定の変化を経て存在しつづけているものが多く、そのことが2期の壺の特徴である。また、壺Bや壺Dのように1期に登場した型式が本期で消滅していくことも、2期の壺の特徴のひとつといえよう。

ところで、2期と確実に限定できる壺Gや壺Hの存在は現状では確認されていないものの、その存在の可能性は十分想定される。

【2期の高坏】高坏A1・高坏B1・高坏B2・高坏C2・高坏D2・高坏E2が認められる。2期の高坏において主体となるものは高坏C・高坏D・高坏Eであり、いずれも外来の東海系高坏である。これらは1期から存在するものが型式変化を経たものであり、口縁端部のつくりの簡略化など共通する型式変化を経ている。なお、弥生系高坏である高坏A1の存在については1期からの残存とする。

【2期の器台】器台A1・器台A2・器台C2が認められる。器台Aは1期から継続する存在である。また、北陸系器台である器台C2は1期に存在する器台C1の型式変化によるものと理解できる。

【2段階の鉢】鉢A1・鉢A2・鉢B1が認められ、弥生系鉢である鉢A1・鉢A2が主体的存在である。また、新出の鉢として鉢B1の存在が認められる。

【2期の有孔鉢】鉢A2が認められるが極めて客体的存在であると推測している。

なお、片口の存在は確認されていない。

【2期の標識土器群】

1期同様、全ての要素を具備した一括遺物は皆無だが、2期の標識土器群としては、上遺跡1号住居、重殿遺跡14号住居、中溝深町遺跡6号井戸出土土器がある。また、2期への限定は控えるものの、3期へ降る可能性を含みつつも2期と想定したい土器群としては前六供1号墳、槍花遺跡1号方形周溝墓の出土土器が挙げられる

3期 畿内系土器の参画による在地様式の展開期

3期は、2期において東海系を主体として外来要素を取り入れてきた在地様式に、新たに畿内系外来要素が参画することによって、在地様式を展開させていく段階である。

とりわけ、3期においては、「①新型式が参画してくること」「②それまでは顕在化しなかった器面のケズリ調整が最終仕上げとして複数形式に現れること」が顕著な特徴であり、1期から2期への変化に比べると、大きな変化・画期をとらえられる。

【3期の甕】甕B2・甕E3・甕E4・甕E5・甕F2・甕F3・甕F4・甕F5・甕F6・甕f・甕G2・甕G3・甕G4・甕g・甕H1・甕H2が確認できる。3期における出土型式は多岐にわたるが、圧倒的に主体を占めるものは甕F3・甕F4であり、それに続いて甕G3・甕G4が多く認められる。S字甕である甕G3・甕G4は、前者ではS字状口縁の形骸化・胴部の長胴化などディテールの多様化が、後者においてはケズリ調整の顕在化が、それぞれ看取できる点が特徴である。また、単口縁平底甕である甕G3・甕G4はケズリ調整の顕在化とその進行が認められる。また、小型甕である甕f・甕gにおいても甕F・甕Gと同様の変化が認めら、在地化の様相がより顕著に理解できる。

さらに、布留甕の系統で理解できる甕Hは存在自体は客体的ではあるものの、その存在・在地変化は3期の重要な指標である。

なお、甕F3・甕F4と甕G3・甕G4とは共伴する事例が少なく、これらに先後関係が想定できる可

能性はある（可能性画期 B）。

【3期の壺】壺 C2・壺 C3・壺 C4・壺 E2・壺 E3・壺 F2・壺 F3・壺 G 群・壺 H 群が認められる。甕同様、3期の壺も出土型式は多岐にわたるが、主体をしめるものは壺 E3 であり、壺 F2・壺 F3 および壺 G 群・壺 H 群がそれに続く。単口縁壺である壺 E3 は、口縁が外反し明確な頸部の屈曲を有して、胴部は球胴を呈する。壺 C4 は折り返し口縁を有する壺であるが、断面四角状の折り返し部は特徴である。長頸壺である壺 F2・F3 は、小中型品と大型品とが分離する様相を呈し、加えて、壺 F3 において胴部外面へのケズリ手法が顕在化する点は、3期の様相を特徴づけている。壺 G 群は東海系加飾壺の系統で把握できる壺群、壺 H 群は二重口縁壺群であるが、ともに本期を特徴づける存在である。但し、壺 G1 や壺 H1 は2期に遡る可能性も有する。

【3期の高坏】高坏 C2・高坏 DE（区別つかず）・高坏 E2・高坏 F1・高坏 F2・高坏 F3・高坏 F4 が認められる。このうち主体は高坏 F2 である。高坏 C2・高坏 DE・高坏 E2 は2期からの残存と理解する。

【3期の器台】器台 A2・器台 B1・器台 B2・器台 C3 が認められる。このうち主体をしめるものは器台 B1・器台 B2 である。器台 C3 は北陸系の在地変化型式と想定される器台である。器台 A2 は2期からの残存と理解できる。

【3期の鉢】鉢 B1・鉢 B2・鉢 C が認められる。そして、3期の鉢の主体は鉢 B1・鉢 C である。なお、現状資料の限りでは、鉢 B1 と鉢 C の共伴が認められないことから、この両者に先後関係が存在する可能性がある。（可能性画期 B）。

【3期の有孔鉢】鉢 A2 が認められるが2期同様、極めて客体的存在であると推測している。

【3期の標識土器群】

3期は集落出土土器と墳墓出土土器では、特に壺において顕著な差異をみせるという特徴をもつが、それぞれに次の資料が挙げられる。集落出土の標識土器群としては、中屋敷東遺跡7号住居、下田中遺跡10号住居、中屋敷・中村田遺跡III 3号住居、

1 太田地域における古墳時代前期の土器編年試案

中西田遺跡60号住居、東今泉鹿島遺跡105号住居、東今泉鹿島遺跡67号住居、矢場遺跡5号住居出土土器が挙げられる。また、墳墓出土の標識土器群としては、屋敷内B遺跡1号墓、八ツ縄遺跡1号墓、成塚住宅団地遺跡C工区1号墓が挙げられる。

4期 前期の様式の解体後の中期的様式の萌芽期

4期は、古墳前期土器の範疇に含む一群ではないが、3期との境界を示すために簡潔に特徴を示す。4期は、1～3期の通有形式であった器台が消滅するとともに、それまで多岐にわたって存在した型式が概ね1～2型式に収斂されていく段階であり、所謂「和泉式土器」（坂野1991ほか）成立の萌芽期と、現状では捉えておくこととする。

【4期の甕】甕 G3・甕 G4・甕 g が認められる。いずれも単口縁平底甕であり、器面の調整としてのケズリが極めて顕著にみられるという特徴をもつ。

【4期の壺】壺 E3・壺 F4 が認められる。壺 F4 には器面調整としてのケズリが顕在化する。

【4期の高坏】高坏 F3・高坏 F4 が認められる。

【4期の鉢】鉢 D・鉢 E が認められる。

【4期の標識土器群】

成塚住宅団地遺跡C工区4号住居、高林三入遺跡C区7号住居出土土器が挙げられる。

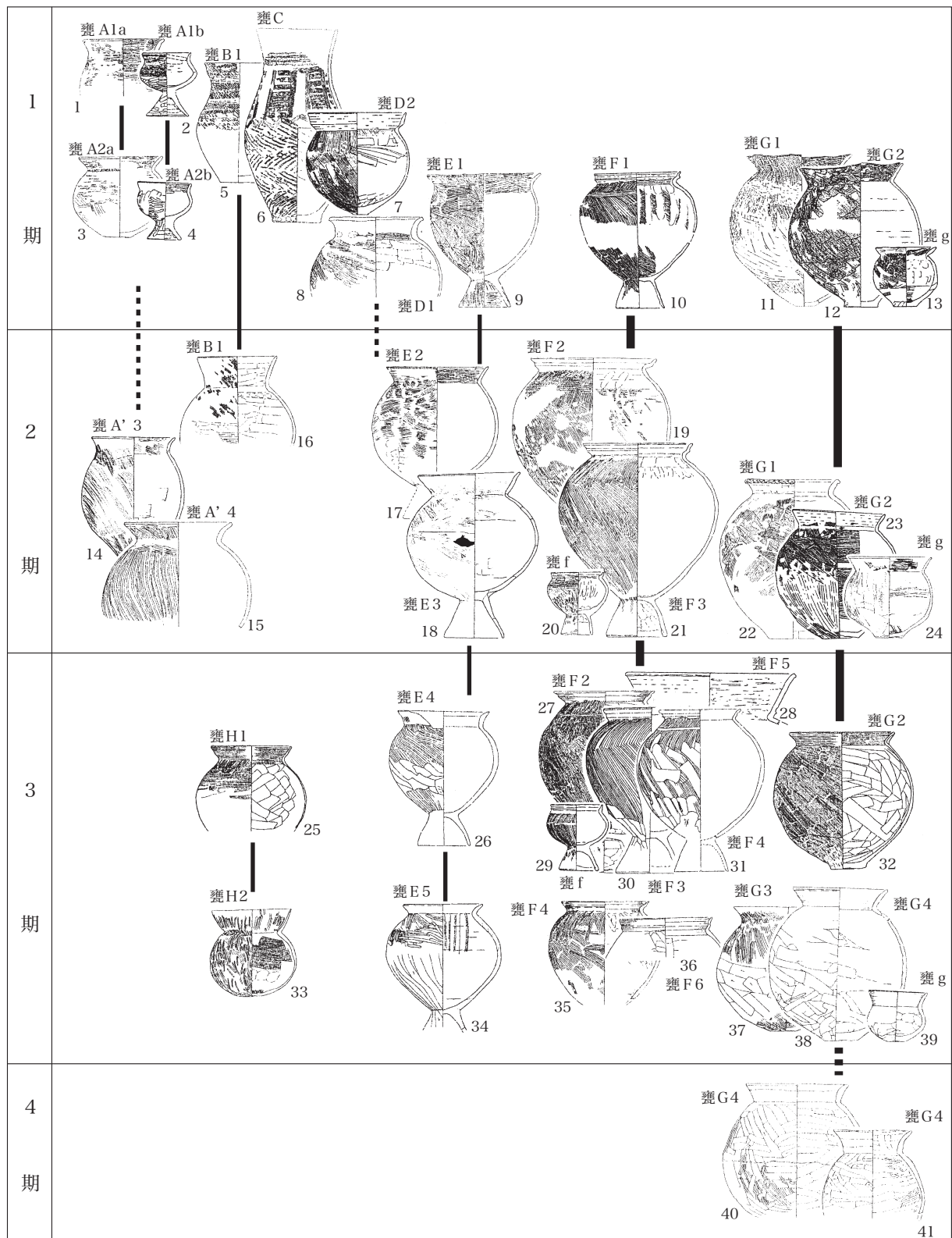
7 他地域編年との併行関係について

（1）群馬地域南部との併行関係

古墳代前期の群馬県各地域の土器様相は、一様でなく、差異が大きい。このことは常に研究史の中で論じられてきたことであるが、とりわけ近年の研究ではその地域差が克明に抽出されてきている。

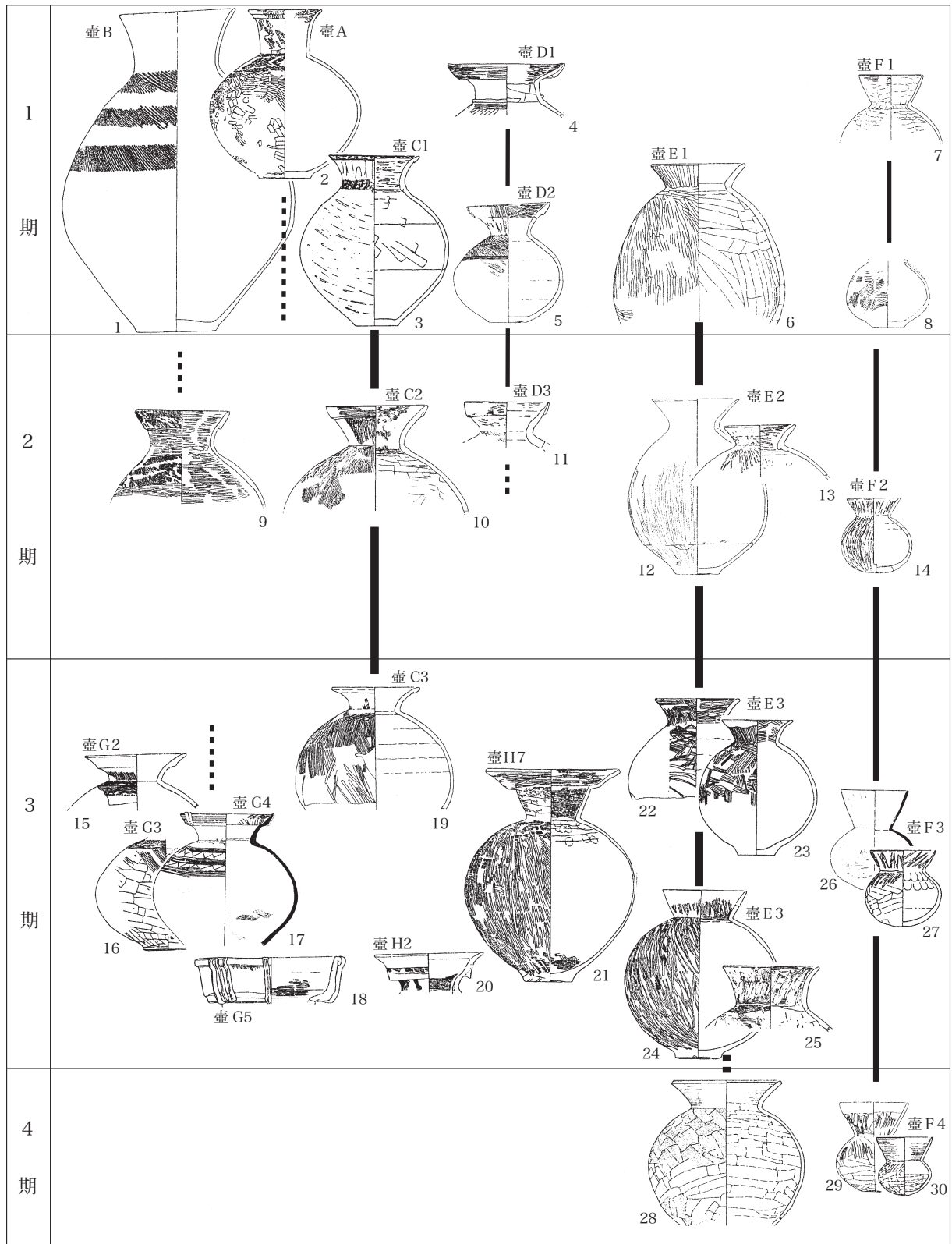
そうした中において、太田地域の古墳前期土器の様相はS字甕や二重口縁壺等の外来系要素を多分に享受した在地様式を形成するという特色をもつ。そして、これに類似する様相としては、群馬県地域では、「群馬南部地域」「佐位地域」「那波地域」が挙げられ、これら地域との検証が対応し易いと考えられる。

このうち、群馬地域南部は、本稿の冒頭でも述べ



1…成塚向山3住 2・4…西長岡東山3住 3・9・11…重殿4住 5…台62ES区7住 6…成塚向山7住 7・10・13…下田中4住
 8…高林三入B区20土坑 12…一本杉Ⅱ25井 14・18・24…上1住 15・17…重殿14住 16…成塚向山6住 19…中溝深町20住
 20…中溝深町6井 21・22…中溝深町32住 23…下田中9住 25・32…磯之宮9住 26・30・31…中屋敷東7住 27…唐桶田16住
 28…下田中10住 29…中屋敷・中村田Ⅲ13住 33・37…東今泉鹿島66住 34…中屋敷・中村田Ⅰ32住 35・36・38・39…中西田Ⅳ60住

図4 太田地域における集落遺跡出土甕の編年案



1…台 62ES 区 7 住 2…西長岡東山 3 住 3…下田中 4 住 4…檜花 3 住 5・8…重殿 4 住 6…一本杉Ⅱ 25 井 7…成塚向山 7 住
 9・10…成塚向山 6 住 11…中溝深町 24 住 12…上 1 住 13…中溝深町 6 井 14…重殿 14 住 15・22・23…中溝ⅡB 区 2 住 16…中屋敷・
 中村田Ⅲ 13 住 17…御正作 4 住 18・20…中屋敷・中村田Ⅲ 14 住 19…中屋敷東 7 住 21…東今泉鹿島 67 住 24…間之原 1 住
 25…台 61 区 2 住 26…御正作 12 住 27…矢場 3 住 28…成塚住宅団地 C 区 4 住 29・30…高林三入 G 区 7 住

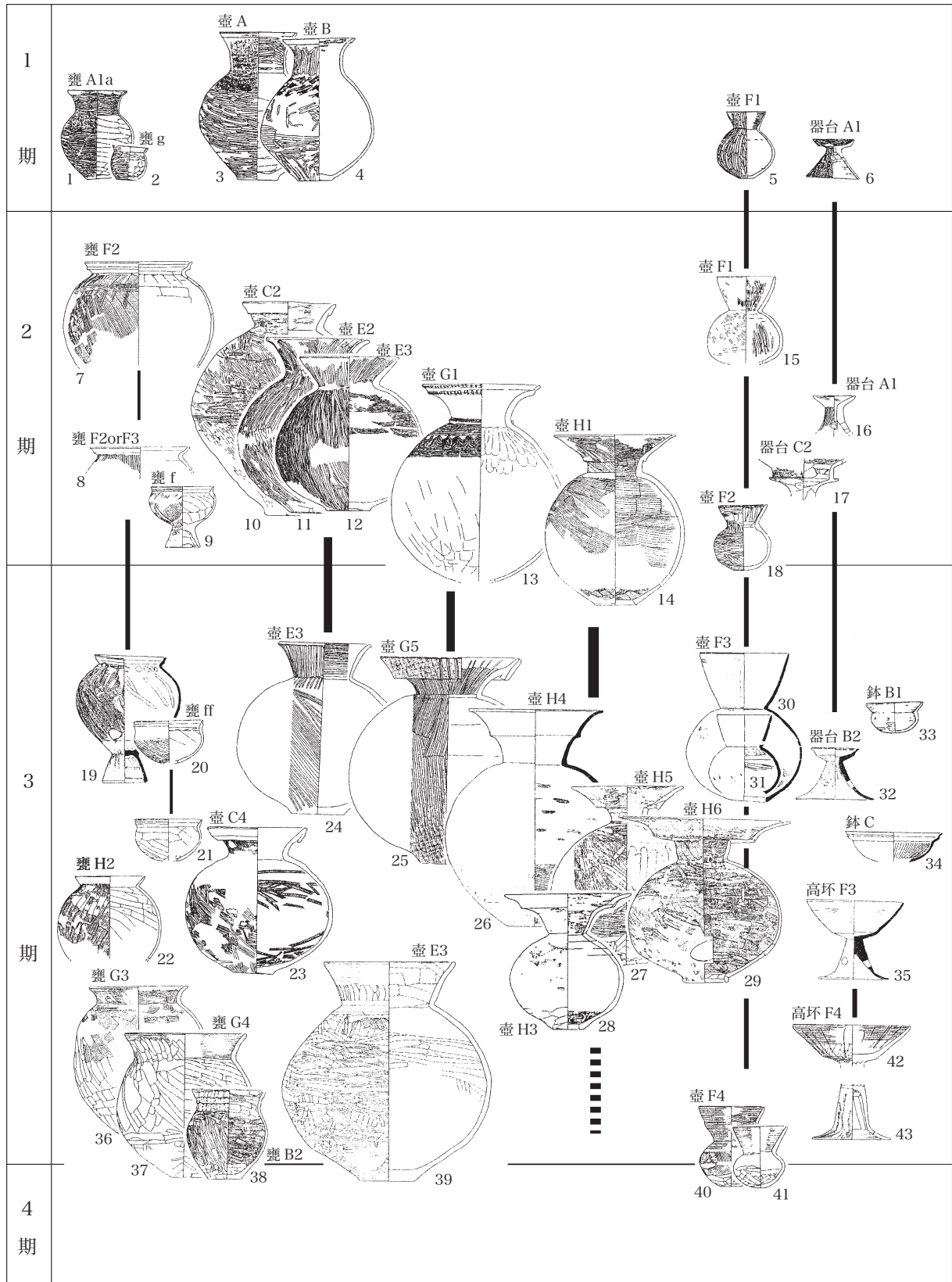
図5 太田地域における集落遺跡出土壺の編年案

		高 环			
1 期	<div>高环 A1 高环 A2</div> <div>1 2 高环 B1 高环 C1 高环 D1 高环 E1</div> <div>3 4 5 6</div>				
2 期	<div>高环 B2 高环 C2 高环 D1 高环 E2</div> <div>7 8 9 10</div>				
3 期	<div>高环 F1 高环 F2 高环 F3</div> <div>11 12 13 14</div>				
4 期	<div>高环 F3 高环 F4</div> <div>15 16 17</div>				

	器 台	鉢	有孔鉢	片口・蓋
1 期	<div>器台 A1 器台 A2 器台 A3 器台 C1</div> <div>18 19 20 21</div>	<div>鉢 A1 鉢 A2</div> <div>27 28</div>	<div>有孔鉢 A1 有孔鉢 A2</div> <div>37 38</div>	<div>片口</div> <div>41</div>
2 期	<div>器台 C2</div> <div>22 23</div>	<div>鉢 B1</div> <div>29 30 31</div>	<div>39</div>	<div>蓋</div> <div>42</div>
3 期	<div>器台 B1 器台 B2 器台 C3</div> <div>24 25 26</div>	<div>鉢 B2 鉢 C</div> <div>32 33 34</div>	<div>40</div>	
4 期		<div>鉢 D 鉢 E</div> <div>35 36</div>		

1・4・41…成塚向山4住 2・18・20…西長岡東山3住 3…槍花3住 5・27…成塚向山7住 6…一本杉Ⅱ 25井 7…重殿14住
 8・10・29…上1住 9・30…下田中9住 11…御正作4住 12…中屋敷・中村田Ⅲ 14住 13…高林三入B区11住 14…東今泉鹿島66住
 15・36…成塚住宅団地C区4住 16・35…高林三入C区7住 17…中溝深町4住 19・21・28・37・38…重殿4住 22…中溝深町20住
 23・31…中溝深町24住 24…中屋敷・中村田Ⅲ3住 25・26…重殿65住 32…矢場13住 33…中屋敷・中村田Ⅰ46住 34…下田中19住
 39・42…中溝深町6井 40…中屋敷・中村田Ⅲ13住

図6 太田地域における集落遺跡出土高环・器台・鉢・有孔鉢・片口・蓋の編年案



1～6…西長岡東山3墓 7・10・13・15・17…槍花1墓 8・14・16…前六供1墓 9…槍花4墓 11・12・18…槍花5墓
19・30…御正作2墓 20～22…槍花3墓 23…槍花7墓 24・25…ハツ縄1墓 26・31・32・34・35…御正作1墓 27…細田2墓
28・33…屋敷内B墓 29・36～43…成塚住宅団地C区1墓

図7 太田地域における墳墓出土土器の編年案

た通り、現状において古墳前期の土器編年が最も整備されている地域である。ゆえに、この地域との対応を優先させることが、それ以外の近隣および遠隔地における併行関係を探る上で、最も重要と考え、ここではその対比を確認する。

群馬地域南部の土器編年（以下、「群馬南部編年」）は、各形式の型式変化と共伴関係を重視した編年（若狭・深澤 2005）であり、本稿での分析手法と同種である、よって、ここでは、「群馬南部編年」の特徴を示すことで太田地域の土器編年（以下、「太田編年」）との併行関係を検証することとする。

弥生後期後半 器種構成としては次の通りである。※（）内は本稿分類。

樽式甕（甕 A1a）、樽式壺（壺 A）、碗形高坏（高坏 A）、樽式鉢（鉢 A）で主体構成され、これに加えて小型台付甕（甕 A1b）、蓋（蓋 A）、片口（片口 A）、有孔鉢（有孔鉢 A）が存在する。特徴としては、外来系土器の影響は受けておらず、伝統的な樽様式の構造を保持している。なお、この時期の末には吉ヶ谷式甕（甕 B）や東海系～南関東系装飾壺などが単発・単器種で加わることがある。

「太田編年」においては、上記の器種構成をもつ土器群は現状では認められず、存在しないと考える。

古墳前期（古段階） 器種構成としてはくの字口縁台付甕（甕 E）・S 字甕（甕 F）、複合口縁広口壺（壺 D）・単口縁壺（壺 E）・長頸壺（壺 F）、東海系大型高坏（高坏 E）・東海系小型高坏（高坏 B～D）、東海系小型器台（器台 A・B）が主体であり、東海西部系（一部東海東部系）色の強い器種構成といえる。なお、吉ヶ谷式系甕（甕 B）・北陸系甕（甕 D）・北陸系器台（器台 C）なども客体的に加わる場合がある。

この段階の明確な指標は「S 字甕 II 類古相」（田口 1981・2000）の存在であり、故地の型に近いパレススタイル壺・東海系高坏・器台（若狭 1998）の存在もそれに加わる。加えて北陸系土器の出土も高い蓋然性をもつ指標（深澤・中里 2000）となる。

「太田編年」においては、上記の器種構成に近似

する段階は「1 期」である。

古墳前期（中段階） 器種構成としては、S 字甕、パレススタイル壺（壺 G 群の一部）・単口縁壺（壺 E）・伊勢型二重口縁壺（壺 H 群の一部）・伊勢型皿系単口縁壺・ヒサゴ壺（壺 F）、東海系大型高坏（高坏 E）・東海系小型高坏（高坏 B～D）、小型丸底鉢（鉢 B）が主体であり、加えて、吉ヶ谷式系甕・北陸東部系甕・くの字口縁台付甕、複合口縁広口壺・北陸系小型器台なども極体的に存在する。

この段階の明確な指標は、S 字甕 III 類（田口 1981・田口 2000）の存在であり、故地型に近似の伊勢型二重口縁壺や小型鉢の存在もそれに加わる。

「太田編年」においては、共伴関係の明確な伊勢型二重口縁壺の明確な存在は認められないものの、それ以外の器種構成を指標とすれば、「2 期」が相当するものと言える。

古墳前期（新段階） 器種構成としては S 字甕、単口縁広口壺・伊勢型二重口縁壺・同型皿系単口縁壺・長頸壺、畿内系屈折脚高坏・東海系小型高坏・小型丸底鉢が主体となる。

この段階の明確な指標は、S 字甕 IV・VI 類（田口 1981・田口 2000）の存在であり、胴部の長胴化の進捗と刷毛の簡素化や刷毛を施さない削りっぱなしの S 字甕の出現や伊勢型二重口縁壺における長胴化や調整の簡素化指向などが挙げられる。さらに、布留式甕模倣品が組成し始める点も挙げられる。

「太田編年」では、器種構成に加えて S 字甕の様相も指標とすれば、「3 期」が相当するものと言える。

古墳前期（新段階）以降「群馬南部編年」における古墳前期（新段階）の器種構成のうち、S 字甕・伊勢型二重口縁壺・東海系小型器台・小型丸底鉢などの型式が消滅する時期がその後に訪れる（深澤 1999）。こうした器種構成の変容を大きな画期と捉え、古墳前期的土器相は終焉すると理解する。

よって、「太田編年」において、同種の変容を成し遂げる「4 期」に関しては古墳前期的土器様相の終焉後の土器様相と捉えることとする。

（2）佐位・那波地域との併行関係

表5 群馬県各地域との併行関係

時期	地域	1 群馬南部	2 那波	3 佐位	4 太田（新田）
古墳前期	1期	保渡田荒前遺跡 H2 住居	山王若宮Ⅱ遺跡 H1 住居	三和工業団地Ⅰ遺跡祭祀	西長岡東山古墳群 3 住居
		元総社西川遺跡 12 住居	山王若宮Ⅱ遺跡 O1 落ち込み	武占遺跡 5 住居	成塚向山古墳群 4 住居
		新保遺跡 141 住居	舟渡遺跡 C 地点一括資料	三和工業団地Ⅰ遺跡 57 住居	下田中遺跡 4 住居
	2期	下佐野Ⅱ遺跡 7 区 45 住居	上之手八王子遺跡 BH116 住居	波志江中宿遺跡Ⅰ採掘坑	上遺跡Ⅰ住居
		倉賀野万福寺遺跡 7 住居	山王若宮Ⅱ遺跡 H2 住居	波志江中野面 A 区 17 住居	重殿遺跡 14 住居
		新保田中村前遺跡 52 土坑	棚島川端遺跡 5 井戸	舞台遺跡 D186 住居	中溝深町遺跡 6 井戸
	3期	上滝遺跡Ⅰ住居	横手早稲田遺跡Ⅲ4 住居	舞台遺跡工境 8 竪穴	中屋敷・中村田遺跡Ⅲ 3 住居
		鈴之宮遺跡 48 住居	角淵城Ⅰ号特殊遺構	三和工業団地遺跡 80 住居	下田中遺跡 19 住居
		下滝天水遺跡 20 住居	棚島川端遺跡 88 住居	下植木老町田遺跡Ⅰ区Ⅰ住居	東今泉鹿島遺跡 105 住居

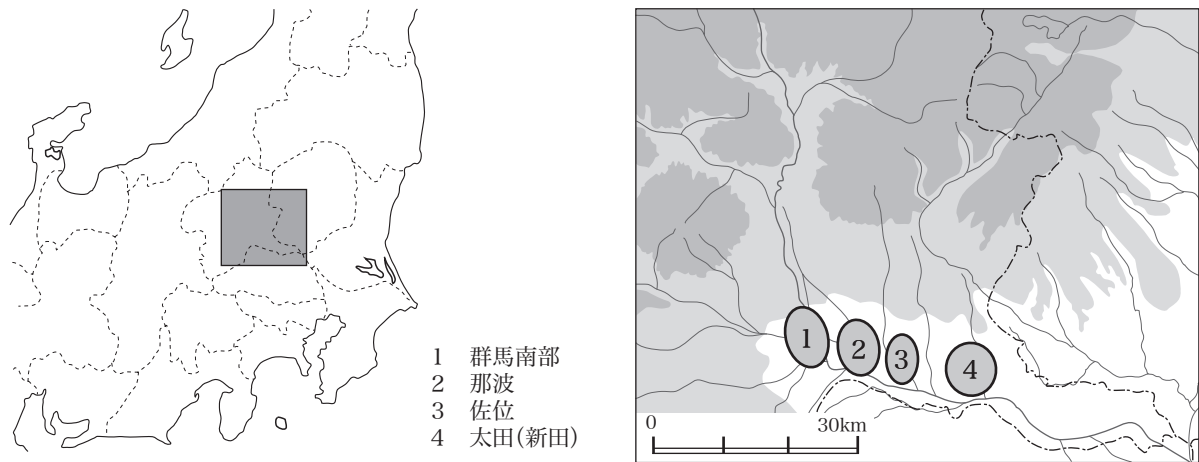


図8 太田地域と類似様相を呈する地域

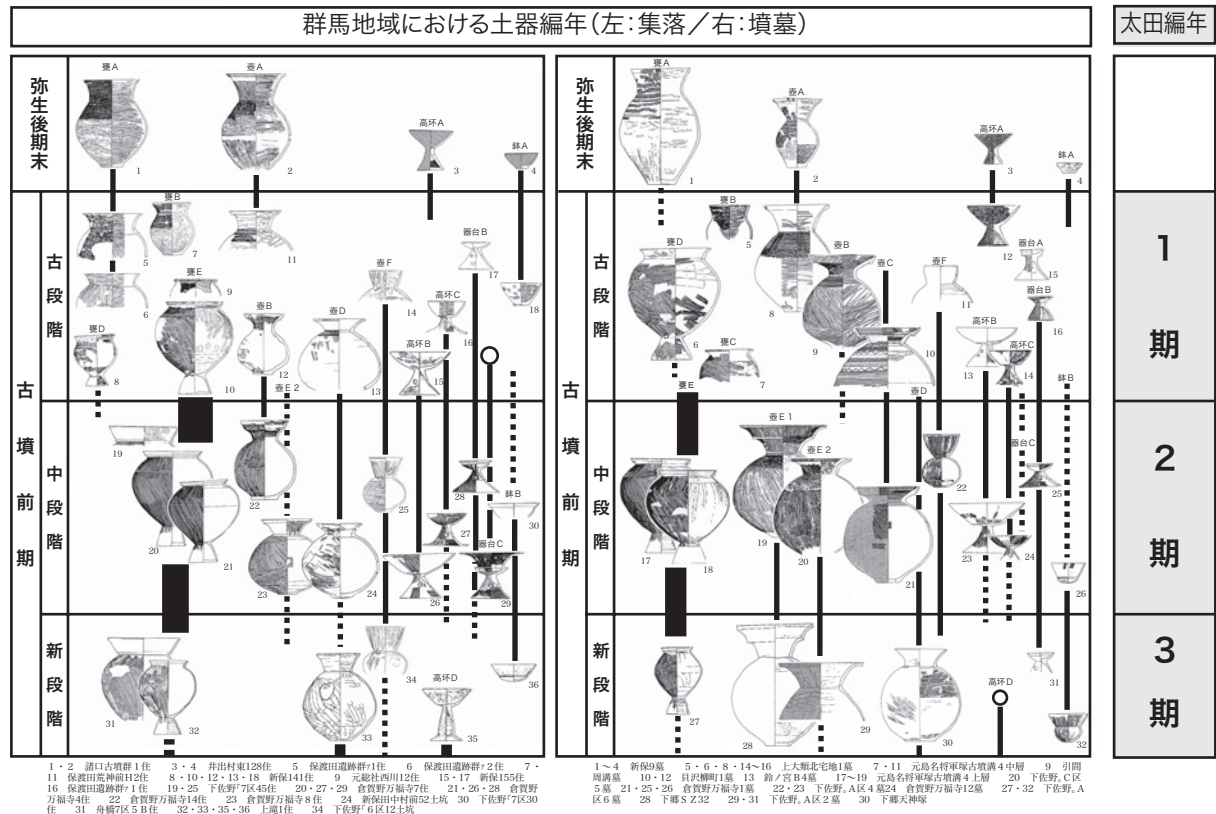


図9 群馬地域編年との併行関係案

第9章 考察

この2地域に関しては、豊富な古墳前期資料をもちつつも、現時点では詳細な土器編年が整備されていないため、群馬地域南部との編年対比のようなことはできない。しかし、それぞれの地域の出土資料の様相を大局的にうかがう限りにおいては、表5のような併行関係が想定される。

(3) 群馬県外の地域編年との併行関係

ここでは、群馬県外の地域編年との併行関係について、想定される関係性を示すこととする。

栃木県地域における古墳前期土器編年（鈴木2002・以下、下野編年）はⅠ～Ⅲ期を設定している。この編年の各形式の器種構成と型式変化の特徴を抽出した時、それぞれ下野編年Ⅰ期→太田編年Ⅰ期、同Ⅱ期→同2期、同Ⅲ期→同3期との対応が大局的には可能である。

埼玉県地域における古墳前期土器は外来系土器の波及・受容様相を主な指標とした3段階区分がある。（書上1994、以下、北武蔵編年）。この編年の指標を照合させると、北武蔵編年第1段階→太田編年Ⅰ期、同2段階→同2期、同3段階→同3期という対応が可能と言える。

中部高地地域における古墳前期土器編年（青木1996・以下、長野盆地編年）は弥生中期後半からの連続した6時期設定のうち、4～6期が設定区分されている。この編年では、各形式における在地弥生後期土器の属性残存と外来系土器参入の度を主

な指標としているが、それらの指標を対比させた時、それぞれ長野盆地編年4期→太田編年Ⅰ期、同5期→同2期、同6期→同3期との対応が想定される。

北陸北東部地域における古墳前期土器編年（川村2000・上越編年）は古墳前期から後期までが16の段階設定がされているが、うち古墳前期については1～6段階の設定がなされている。段階区分のうち、主に高坏・器台・壺における外来要素の参入程度を目安にすると、上越編年Ⅰ・2段階→太田編年Ⅰ期、同3・4段階→同2期、同5段階と6段階の一部→同3期との対応が想定される。

北陸南西部における古墳前期土器編年（田嶋1986・加賀編年）は弥生後期から古墳後期までを15群に設定したうちの、5群から11群が概ね相当する。この編年の指標のうち、主に高坏・器台・鉢の変遷を対応させると、加賀編年5～8群→太田編年Ⅰ・2期、同9・10群が太田編年3期に対応させることが可能である。

東海西部における古墳早～前期土器編年は廻間様式（赤塚1990）と松河戸様式（赤塚1994）によって設定されている（尾張編年）。このうち、S字甕・高坏・二重口縁壺・器台・鉢の型式変化と器種構成を踏まえると、廻間Ⅱ式の一部→太田編年Ⅰ期、同Ⅲ式→同2期+3期の一部、松河戸Ⅰ式→同3期、松河戸Ⅱ式→同4期という対応が可能である。

表6 県外他地域との併行関係（案）

太田 (成塚向山)	群馬南部 (若狭・深澤2005)	下野 (鈴木2002)	北武蔵 (書上1994)	長野盆地南部 (青木1996)	上越 (川村2000)	加賀 (田嶋1990)	尾張 (赤塚1990)	想定暦年
	弥生後期後半 (樽3期)			3期				
Ⅰ期	古墳前期古段階 (浅間C軽石降灰 ⁽²⁾)	Ⅰ期	第1段階	4期	1段階 2段階	漆町5群 漆町6群	廻間Ⅱ式	300
2期	古墳前期中段階	Ⅱ期	第2段階	5期	3段階 4段階	漆町7群 漆町8群	廻間Ⅲ式	
3期	古墳前期新段階	Ⅲ期	第3段階	6期	5段階	漆町9群	松河戸Ⅰ式	400
4期					6段階	漆町10群	松河戸Ⅱ式	

5 おわりに

これにて本稿の目的は一応、達成したものとする。組合せと型式変化の仮説を指標としての検証によって、結果的には、太田地域の古墳前期土器の編年は3期に区分されることとなった。

遺跡の分布論は本稿の目的ではないため、上記編年に基づく、その種の議論は別の機会に改めて論じることとする。しかし、端的にその特徴をいうならば、「太田地域の古墳時代前期社会は太田編年3期に入り、急激に遺跡数を増加させ、一気に社会の展開期を迎える」のである。そして、この動きは、この地域の前期古墳成立を考えていく上で、大いなる示唆を与えていることは言うまでもない。

註

(1) 本稿における地域名称は、文献(若狭2000)において区分された地域をもとに、文献(若狭・深澤2005)において一部名称を変更した地域名を基準としている。なお、それらの文献において「新田地域」と区分された地域を本稿では「太田地域」と便宜的に呼称することとする。

(2) 群馬県地域では古墳前期段階で浅間C軽石の降灰が認められる。当然ながら、この降灰の有無を主たる指標として土器組列を行うことは土器編年ではない。但し、異なる地域の土器群の共時性を確認することに限定するならば、その有用性も認められよう。そこで、一次堆積と考えられる浅間C軽石が覆土中に認められ、かつ出土遺物が一定量伴っている遺構としては次のものが挙げられる。

群馬県地域南部では、保渡田荒神前遺跡H2号住居・元総社西川遺跡6号住居・同12号住居・新保遺跡141号住居、佐位地域では三和工業団地I遺跡148号住居・同祭祀跡、新田(太田)地域では西長岡東山古墳群3号周溝墓などがあげられる。いずれも覆土中・被覆層に浅間C軽石が存在することから、その降灰以前における共時性が認識できる。

上記の出土土器群はいずれも、「群馬南部編年」での古墳前期古段階＝「太田編年」での1期の土器様相を呈している。よって、浅間C軽石の降灰はこの段階のうちに起こった現象と理解ができる。

また、降灰後の構築が明確な墳墓としては、那波地域の公田東遺跡1号周溝墓・前橋天神山古墳、太田地域の成塚向山1号墳が挙げられ、いずれも墳丘盛土下に浅間C軽石が存在することから、その降灰以降の時期の築造と考えられる。但し、このことだけから各築造時期の下限をおさえることは無理であり、あくまで、降灰以降という認識のみに留まる。

参考文献

- ・青木一男 1996「北平1号墳の時間的位置づけ」『大星山古墳群・北平1号墳』財団法人長野県埋蔵文化財センター
- ・赤塚次郎 1990「考察」『廻間遺跡』財団法人愛知県埋蔵文化財センター
- ・赤塚次郎 1994「松河戸様式の設定」『松河戸遺跡』財団法人愛知県埋蔵文化財センター
- ・梅澤重昭 1971『太田市米沢二ツ山古墳』群馬県教育委員会
- ・梅澤重昭 1978『群馬県太田市五反田・下諏訪遺跡』太田市教育委員会

1 太田地域における古墳時代前期の土器編年試案

- ・梅澤重昭・橋本博文 1981「4. 群馬県」『シンポジウム関東における古墳出現期の諸問題』
- ・大木紳一郎 1980『庚塚・上・雷遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- ・大塚初重・小林三郎 1967「群馬県高林遺跡の調査」『考古学集刊』第3巻第4号
- ・岡本範之 1997「調査の成果と課題」『中屋敷・中村田遺跡』新田町教育委員会
- ・尾崎喜左雄・今井新次・松島榮治 1968『石田川-石田川遺跡調査報告-』「石田川」刊行会
- ・書上元博 1994『稲荷台遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- ・加納俊介 1990「S字甕とS字甕もどき」『マージナル』10
- ・川村浩司 2000「上越市の古墳時代の土器様相-関川右岸下流域を中心に-」『上越市史研究』5
- ・熊野正也 1974「特殊な器台形土器について(1)」『史館』3
- ・熊野正也 1978「特殊な器台形土器について(2)」『史館』8
- ・熊野正也 1980「特殊な器台形土器について(3)」『史館』12
- ・小泉範明・飯島義雄 1998「石田川式土器の再検討(1)-甕形土器を中心-」『群馬県立歴史博物館紀要』19
- ・小泉範明・井上昌美・飯島義雄 1999「石田川式土器の再検討(2)-壺形土器を中心として-」『群馬県立歴史博物館紀要』20
- ・小泉範明・井上昌美・飯島義雄 2000「石田川式土器の再検討(3)-高杯・器台・鉢形土器を中心として-」『群馬県立歴史博物館紀要』20
- ・鈴木芳英 2002「古墳出土土器編年のための集落出土土器編年」『栃木県考古学会誌』23
- ・田口一郎 1981『元島名将軍塚古墳』高崎市教育委員会
- ・田口一郎 1987「パレススタイル壺の末裔たち」『欠山式とその前後 研究・報告編』東海埋蔵文化財研究会
- ・田口一郎 2000「北関東西部におけるS字口縁甕の波及と定着」『第7回東海考古学フォーラム S字甕を考える』東海考古学フォーラム三重大会
- ・田嶋明人 1986「漆町遺跡出土土器の編年の考察『漆町遺跡』I 石川県立埋蔵財センター
- ・橋本博文 1993「関東北部」『シンポジウム2 東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会新潟大会実行委員会
- ・原田幹 1996「S字甕の分布と地域型」『鍋と甕 そのデザイン』東海考古学フォーラム尾張大会
- ・福島正史 2000「考察」『新田東部遺跡群II』新田町教育委員会
- ・若狭徹 1990「群馬県における弥生土器の崩壊過程」『群馬考古学手帳』vol.1 群馬土器観会
- ・若狭徹 1998『第2回特別展 人が動く・土器も動く -古墳が成立する頃の土器の交流-』かみつけの里博物館
- ・若狭徹 2000「S字口縁甕波及期の様式変革と集団動態-群馬県地域の場合-」『S字甕を考える』東海考古学フォーラム三重大会
- ・若狭徹・深澤敦仁 2005「北関東西部における古墳出現期の社会」『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』新潟県考古学会
- ・深澤敦仁 1998「上野における土器の交流と画期」『庄内式土器研究』16
- ・深澤敦仁 1999「赤井戸式土器の行方」『群馬考古学手帳』9
- ・深澤敦仁・中里正憲 2002「群馬県玉村町所在・砂町遺跡出土の北陸系土器の位置づけをめぐって」『研究紀要』20 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団